

1 研究主題

学習や生活の場面で活用できる！生きて働く力を育む授業づくり ～大笹生支援学校の育てたい子ども像を目指して～

2 研究主題設定の理由

【「生きる力」「生きて働く力」とは】

○「生きる力」とは、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人と共に強調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などである。

○平成28年12月の中央教育審議会答申を受け、今回の改訂は、児童生徒一人一人が社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。そのためには、「何を学ぶか」という教育の内容を重視しつつ、児童生徒がその内容を既得の知識及び技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できる生きて働く知識となることを含め、その内容を学ぶことで児童生徒が「何ができるようになるか」を併せて重視する必要がある、児童生徒に対してどのような資質・能力の育成を目指すのかを指導のねらいとして設定していくことがますます重要となる。

(特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編より)

本研究は、児童生徒が将来社会に参加して豊かに生活していくために、学校での学びが生きて働く力に結びつくことを目指し、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりについて3年計画で考察する。

令和4年度は「教科等横断的な視点を踏まえて」、令和5年度は「学習の基盤となる資質・能力を育てる」を副題として、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりとはどのようなものか理解と実践を進めてきた。3年次である令和6年度は「大笹生支援学校の育てたい資質・能力を目指して」を副題として、1・2年次の研究成果を生かし、本校の学校教育目標で掲げる育成したい資質・能力を具現化する授業づくりに向けて取り組んでいきたい。

3 研究目標

- (1) 「生きて働く力」につながる、教科等横断的な視点に立って資質・能力を育成するための指導方法について3年計画で研究を進め、年次ごとに成果や課題を明らかにする。
- (2) (3年次) 副題を「大笹生支援学校で育てたい子ども像を目指して」とし、学校教育目標や目指す児童生徒像を踏まえ、各学部で掲げる資質・能力を、児童生徒の障がいの状態や特性及び発達の段

階等を考慮し、それぞれの教科等の役割を明確にして関連を図りながら、年間指導計画一覧表を活用して授業づくりを計画・実施し、教科等横断的な視点で育てていくことを目指す。

(3) 授業づくりを含めた校内研究の推進を通して、教職員の指導力と専門性の向上を図る。

4 研究方法及び内容

(1) 主な研究組織は小学部・中学部・高等部とし、各学部でさらに小グループを組織し、研究テーマに基づいた授業実践を通して校内研究を進める。

(2) 資質・能力の育成を目指し、各教科の特質に応じた指導方法等を検討し授業を実践するとともに、目指す資質・能力が確かに育成されているか評価していく取り組みを通して、生きて働く力へ近づくことができたか考察する。授業づくり計画書の様式を用いて実践をまとめ、また教科間の関連について年間指導計画一覧表に表す。

(3) 各グループにおいて授業研究（課題や目標の整理、単元計画の検討、年間指導計画一覧表の活用、授業のビデオ視聴による協議等）を実施し、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成について理解を深めるとともに、学び得た知識を各自の授業実践に生かす。

(4) グループ内外での授業参観や学習会、公開研究会等で実践を発表し、教員が互いに学び合う機会とする。

(5) 5月と2月の研修全体会において、年度ごとに校内研究の概要について教員に共通理解を図り、各研究グループのまとめから成果と課題を共有する。

(6) 年度ごとに実践事例集を作成し、生きて働く力を目指す授業づくりについての実践を本校の校内研究のデータとして蓄積し、広く活用できるようにする。

(7) (研究テーマに関わる教育講演会) 令和6年度は、6月3日(月)に筑波大学、上野学園短期大学 下山直人氏、12月13日(金)公開研究会において国立特別支援教育総合研究所 丹野哲也氏を講師に迎え、講話いただくとともに、本校の研究について助言をいただく機会とする。

5 研究の実際

(1) 1年次の取り組み

【教科等横断的な視点を踏まえて】

将来に生きて働く力となるには、各教科で学んだ力が総合的に働くようになることが理想とされる。そこで教科等横断的な視点に立ち、資質・能力を育成する授業づくりが大切になる。

1つの単元のまとまりを通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現させ、教科の力を育成する。(図1、矢印①) また、育まれた資質・能力を、他の教科等でも活用・発揮してさらに高めていく。(同矢印②)

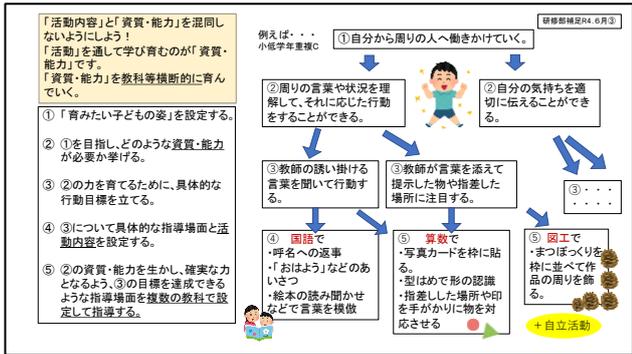


(図1 教科等横断的な視点に立った資質・能力とは)

このように、学びを他の教科等の学習場面や生活場面へ広げていくことで、学びが深まり、資質・能力が確実に身に付いていく。そして生きて働く力へつながっていくと考えた。

1年次の研究では、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成に向かう授業づくりとはどのように考えていくのか、実践を通して理解を進めていくこととした。また前年度までの校内研究「深い学びの実現を目指す授業づくり」の成果を生かしながら教科の力を育成しつつ、さらに教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図ったりしながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指して取り組んだ。

【グループ研究実践】



(図2 目指す資質・能力と授業づくりを整理するシート)

小・中・高の学部からさらに小グループに分かれての研究では、対象児童生徒または対象学習グループにおいて、まず「どのような児童生徒の姿を目指して資質・能力を育成していくのか」を明確にするようにした。目指す児童生徒の姿に向かって、各教科の授業でどのように資質・能力を育成していくかを整理するために、研修部から提案したシート(図2)を活用しながら検討していった。

グループで設定した目指す資質・能力の例

- 「身近な人に自分からかかわる力」(小学部重複低学年グループ)
- 「言葉や身振りで想いを伝える力」(小学部重複中学年グループ)
- 「相手の気持ちを考えられる力」(中学部通常グループ)
- 「言葉で伝える力」(高等部2グループ)

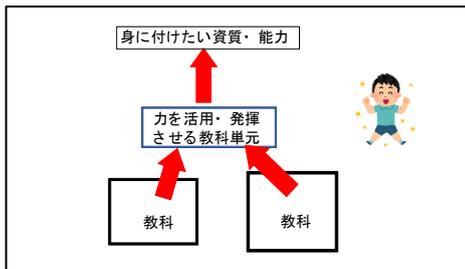


言語能力の向上を目指す資質・能力を設定するグループが多くあった。自分の想いを伝えるための言葉の力や人との関係づくりにおいて自分からかかわろうとする力を設定し、その力を育むために児童生徒が思考する場面を大切にした実践があった。(写真1) また、作業学習等の学習場面で身に付けた力を繰り返し活用・発揮させ、生徒の力を確かなものにしていこうとする実践があった。(写真2) 各グループの取り組みは令和4年度校内研究実践事例集にまとめている。

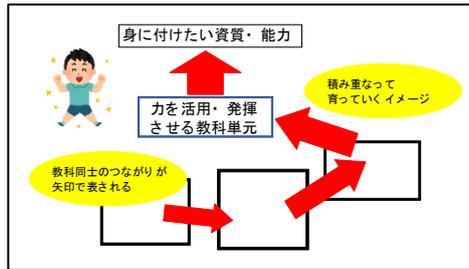
【教科等横断的な視点を踏まえ、教科と教科の関連を年間指導計画一覧表で表す】

教科等横断的な視点に立ち、どの教科単元をつなげて資質・能力を育成していくかという考えを組織的に計画するものとして表す必要がある。本校で以前から作成している年間指導計画一覧表を活用し、教科等の横断的なつながりを矢印で表そうとした。

それぞれの教科で身に付けた力を、ある1つの教科単元に集め、そこでそれらの力を活用・発揮させて力を高めようとする表し方(図3)。1つの教



(図3 目指す資質・能力に向かう矢印①)



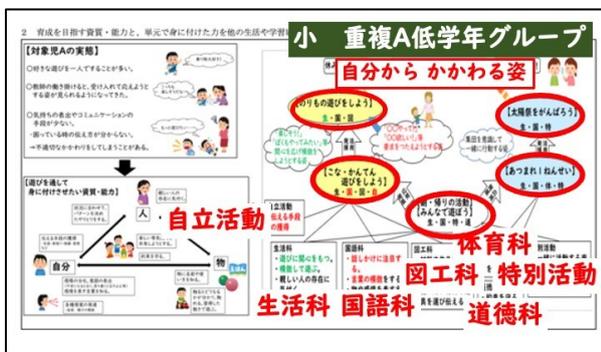
(図4 目指す資質・能力に向かう矢印②)

科単元で身に付けた力をその次の教科や単元で活用・発揮させていくことを繰り返し、力を積み重ねるように育てていこうとする表し方（図4）。およそ2つのパターンに大別された。

防災教育に関する学習活動を中心として育成する資質・能力「自分で考え、行動する力」（高1グループ）の例では、社会科や道徳科で学んだことを生活単元学習で生かし、問題について探究していこうとする、いわば現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育む学習活動には（図3）のような授業づくりが効果的であった。また、言語能力など日々の学習で繰り返し学び、学習の基礎となる資質・能力を育てていく学習活動については、（図4）のような授業づくりが効果的であると言える。

【1年次の成果と課題】

「目指す資質・能力を明確にした授業づくり」「身に付けた力を活用・発揮して学びを確かなものにしていくこと」「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を年間指導計画一覧表に表すこと」



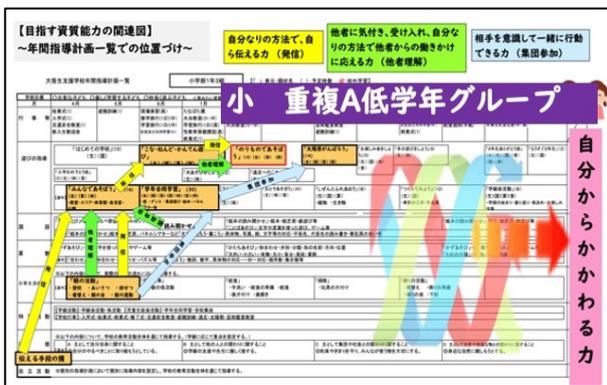
（図5 授業づくり計画書構想メモ）

これらに取り組むことで、各教科の目標も改めておさえることになり（図5）1つの教科の学びが1年間の授業計画の中でどのような位置にあり、他教科の学びとどのように関連しているか、俯瞰して捉え直すことができた。（図6）

目指す資質・能力を設定したうえで、様々な学習場面で身に付けた力を生かそうとしたことにより、教員が教科等横断的な視点についてより意識をもつようになり、児童生徒に「何が身に付いたか」や「何ができるようになったか」を見取る視点も明確になってきた。結果としてわかりやすい指導にもつながり、児童生徒自身が成長する実感をもてるものになったことも報告された。

教科等を超えて横断的につながりをもって授業を組み立て、資質・能力を育成していくことの大切さや、それまで教科ごとに離れていた学習を相互に関連づけることの効果に気づくことができた。

一方で、教科の指導を支える自立活動の指導との関連については教育課程によって偏りがあり、学校全体で自立活動の視点を授業づくりに取り入れ表していくことが課題となった。



（図6 年間指導計画一覧表の活用①）

（2）2年次の取り組み

【学習の基盤となる資質・能力を育てる】

教科の力を育成していくには、言語能力に代表される学習の基盤となる資質・能力が必要である。2年次の研究で着目する「学習の基盤となる資質・能力」とは、学習指導要領で挙げられている「言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力」の3つとする。

例えば言語能力は学習活動を支える重要な役割があり、全ての教科等においてそれぞれの特質に応じた言語活動の充実を図る必要がある。学習の基盤となる資質・能力に着目して授業づくりを考えていくことで、教科で身に付ける資質・能力と教科等横断的な視点に立った資質・能力の双方について理解を深め、生きて働く力へつながる授業づくりを進めることができると考える。

言語能力には「他者の思いを受け止め、自分の思いを伝える」「説明や資料等から知識を得る」ほか多くの働きがある。1年次の成果を生かし、まず対象となる児童生徒の姿からどのような資質・能力を目指すのか具体的な姿を掲げ、「育成したい資質・能力」を設定することとした。

【グループ研究実践】

グループごとに取り組んだ学習の基盤となる資質・能力（3つの中で主として研究を進める資質・能力）と身に付けたい力（目指す児童生徒の姿）の実践事例の一部を以下に挙げる。詳細や他グループの取り組みは令和5年度校内研究実践事例集にまとめている。

小学部重複 A 中学年グループ 言語能力：思いを言葉で表現したり伝えたりする力～気持ちを表す言葉～




＜国語科＞

- ・言葉を知る ・語彙を増やす
- ・相手に注目する

＜生活科＞

- ・親しい人とのかかわり
- ・模倣して遊ぶ

＜音楽・図工・体育科等＞

- ・頑張ったこと等を発表する
- ・友達の発表を聞く

＜算数科＞

- ・自分の考えや思いを伝える
- ・友達の発表を聞く




- ・学んだことに繰り返し触れる機会を設定する
- ・児童に応じた表現を引き出す工夫

様々な場面で気持ちを身近な教師や友達に言葉で伝える姿へ

中学部通常グループ 情報活用能力：自分の考えを形成するために、情報を活用する力




＜国語科＞

「手紙を書こう」
「ローマ字を書こう」

- ・文章の表現、構成、文字入力

＜生活単元学習＞

「学校周辺を調べよう」
「学習旅行へ行こう」

- ・検索、入力、レイアウト等

＜外国語科＞

「英語を聞こう、話そう」

- ・操作、入力等

＜数学科＞

「測ってみよう」

- ・数値や写真などの情報を整理
- ・情報を活用して発表する



- ・生徒の情報活用における実態把握
- ・ICT 機器を使用する意図、必要性の明確化

情報活用を通して、自分から考え行動できる姿へ

高等部2学年通常グループ 問題発見・解決能力：物事の中の課題に気付き、学んだことを生かして自ら解決しようとする力



＜生活単元学習＞
「修学旅行のまとめ たこ焼きを作ろう」
・調理の手順と実際 ・人数と作る数の課題

＜作業学習 木工班、陶芸班＞
・販売会で売れた製品と売れなかった製品の違いを話し合い、よりよい製品づくりを行う

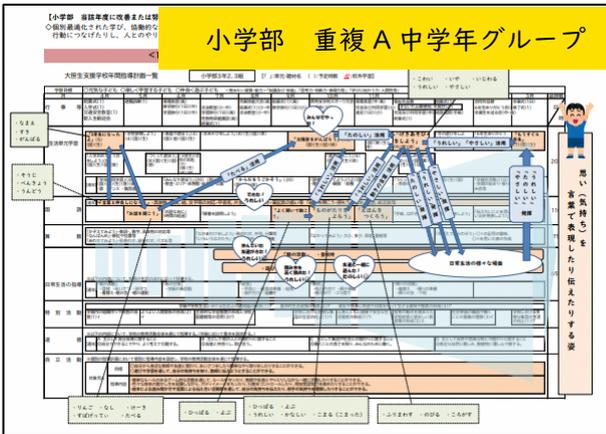
- ・各教科の基礎的知識 ・必要な情報の収集整理分析
- ・見通しをもって課題に向けて取り組むスキル

学んだことを生かして解決しようとする姿へ

【2年次の成果と課題】

年間指導計画一覧表の活用 教科と教科の関連を資質・能力の視点で再確認する

育成したい資質・能力を目指して教科や単元等を横断して授業を組み立てていく際、活動内容（コンテンツ）をつなげるだけではなく、資質・能力（コンピテンシー）をつなげていくことについて、改めて考えを整理した。活動内容をいくつかの教科で関連させることは、それぞれの教科の見方・考え方で事象を捉え直すという意味で学びは深まると言える。もう一歩進んで、活動内容での横断から資質・能力での横断へと意識を変えていく必要がある。



(図7 年間指導計画一覧表の活用②)

各教科の目標を達成させることに加えて、各教科を分断せずに資質・能力の視点でつないでいくことで、各教科で学んできた力が総合的に働き、生きる力につながっていくと考えられる。

対象児童生徒に関わる教員チームが、それぞれの教科授業においてどのような活動を通して資質・能力を育成していくか捉え、共通理解を図る。この作業を行うことで重要さが再確認され、2年次で具体的に矢印表記ができるグループが増えた。(図7)

目指す資質・能力に向けて単元ごとに評価していく工夫

授業づくり計画書の単元シートで、単元のまとめりに評価をしていくようにした。目指している資質・能力の視点で学習の様子を記録して評価し、次の授業へつなげる。年間指導計画一覧表と合わせ、身に付けた力を活用・発揮できているか、資質・能力を育成できているか振り返ることができた。また「この単元で目指す児童生徒の姿」を記すことで、評価する場面や活動する姿を意識して見取ることになり、単元を積み重ねPDCAサイクルで学習計画と評価に取り組むことができた。

例として、「言語能力の視点で児童の変容を見ていくことができ、学習したことがどのように将来の生活で役に立つのか考えようとする事ができた。」という声があった。また、実践を進めていくうちに「児童が自分から発信する姿」のように目指していた姿だけでなく、「周りの言葉を理解する力」等、関係する資質・能力についても向上が見られたという報告もあった。

改めて学習の基盤となる資質・能力の育成が教科学習を支え、児童生徒の力を高めていくとわかった。

育成を意識する資質・能力の偏り

3つの資質・能力から主な研究対象とするものを選択して取り組みを進めたが、言語能力を研究する実践が多く、他の2つについて考えを深める実践が少なかった。児童生徒の障がいの状態によって、情報活用能力や問題発見・解決能力に取り組むことに難しさを感じている側面もある。

情報活用能力は、情報機器を操作する能力のみではなく、情報そのものを効果的に活用する力も含まれている。問題発見・解決能力は、思考を働かせる場で育成され、主体的に学ぼうとする力に直結する資質・能力である。

学習の基盤となる資質・能力はそれぞれが独立して育成されるものではなく、実践を進めていくなかで、複数の資質・能力が互いに高まり身に付いていくという気付きも生まれている。活動内容の手立ての工夫や習得・活用・探究を意識した単元構成を検討し、相互に関連させながら育成を考えるようにしていきたい。

自立活動の指導と教科指導の関連について

教育講演会や外部講師からの助言等を通して、自立活動の内容と各教科等との関連を図って指導していく必要性について意識を高めてきた。2年次の実践では単元シートの1つを自立活動の指導の内容で表し、別の単元シートにおいて他の教科授業に関連づけて考察していくグループもあった。自立活動そのものは校内研究の中心ではないが、教科の学習の支えとなるものであり、令和6年度にはすべての教育課程で自立活動の時間における指導が導入されることとなる。さらに実践と考察を重ねて自立活動の指導という土台のもと教科指導の充実を図るようにしていきたい。

(3) 3年次の取り組みに向けて

【大笹生支援学校の育成したい子ども像を目指して】

変化の激しい社会の中で、主体的に学んで必要な情報を判断し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を発見し解決していくために必要な力を、児童生徒一人一人に育んでいくためには、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身に付けた力を統合的に活用して現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡して育んでいくことが重要となる。(特別支援学校学習指導要領解説 総則編より)

校内研究3年次では1・2年次の成果を生かし、本校で目指す児童生徒像に向かって、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成し、将来に生きて働く力へつながる授業づくりを研究する。

学校教育目標を「児童生徒一人一人の自立と社会参加を目指し、たくましい生活力と心豊かな人間の育成を図る。」目指す児童生徒像を「明るく元気な子ども 進んで学習する子ども 仲よくがんばる子

ども」と示している。令和5年度にカリキュラム・マネジメント委員会を中心として「大笹生支援学校の育成したい資質・能力」が整理された。教育目標を3本の資質・能力の柱で捉え直し、さらに学部ごとに目標と目指す児童生徒像を示している。このことから、学部ごとに掲げる「目指す児童生徒像」に向け、学部の特色を生かしながら児童生徒の資質・能力の育成を目指す授業づくりに取り組むことで、本校で育成したい児童生徒像へつなげていくことができると考える。具体的には、学部ごとの令和6年度重点目標について授業で具現化していく実践研究を進めていくようにする。

令和6年度 各学部重点目標

小学部	・個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びの中で、指導計画を基に学年や類型において系統的な指導を行いながら教科等横断的な視点に立ち、身近な人とやりとりしたり、感じたことや想像したことを言葉によって自覚したり、情報を理解し自分の考えをまとめたりなどする言語能力を育成する。	・効果的なICTの活用を通して、情報を主体的に捉え、整理したり比べたりして自分の考えをもち、それを身近な人に分かりやすく伝えるなどの情報活用能力を育成し、児童が様々な場面で一人一人の能力を発揮することができるようにする。
中学部	・個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びの中で、指導計画を基に学年や類型において系統的な指導を行いながら教科等横断的な視点に立ち、多様な他者を認めたり、集団の中で自分の役割を果たしたりすることで、他者と協力・協働して社会に関わろうとする人間関係育成・社会形成能力を育成する。	・効果的なICTの活用を通して、情報を整理・比較したり、課題解決に向けて情報を主体的に活用したりしようとする情報活用能力を育成し、生徒が様々な場面で一人一人の能力を発揮することができるようにする。
高等部	・個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びの中で、指導計画を基に、学年や類型において系統的な指導と教科等横断的な視点に立ち、地域の人々との協働や探究学習など幅広い学習を通して生活の中で活用できる力を育成し、自立と社会参加ができる人間性を育成する。	・効果的なICTの活用を通して生徒の情報活用能力を育成し、他者と協働して様々な情報を結びつけたり、問題の発見や解決に向けて活用したりして、新たなことに気づいて情報社会に主体的に参画できる態度等を身に付けることができるようにする。

【育成したい子ども像を目指して、育みたい資質・能力】

本校では児童生徒に育みたい資質・能力として、各教科等で身に付ける資質・能力と、教科等横断的に身に付ける資質・能力を設定している。教科等横断的に身に付ける資質・能力として10の力（図9）を設定しているが、このうち学習の基盤となる資質・能力には2年次で取り組んだ3つのほか、キャリア発達を促す基礎的汎用的能力に関連付けた項目も取り入れている。（カリキュラム・マネジメント全体推進計画より）

授業づくりにおいては、教科の目標に加え、どのような資質・能力を教科等横断的に育成していくのか明らかにする。2年次の取り組みの成果を生かして「この単元で目指す児童生徒の姿」を記し、活動する姿を評価する場面として実践を積み重ね、目指す児童生徒の姿に近づいているか考察する。

学習の基盤となる資質・能力					現代的な諸課題に対応する資質・能力				
①言語能力	②人間関係形成・社会形成能力	③問題発見・解決能力	④自己理解・自己管理能力	⑤情報活用能力	⑥キャリアプランニング能力	⑦健康・安全・食に関する力	⑧多様性を尊重し他者と共生していく力	⑨豊かなスポーツライフを実現する力	⑩主権者として求められる力

（図9 教科等横断的に身に付ける資質・能力）

生きて働く力の育成

R4 1年次 ～教科等横断的な視点を踏まえて～

- (1) 教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりとは 理解と実践
 - 育成を目指す資質・能力の明確化
 - 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と教科等における資質・能力の育成
 - 身に付けた資質・能力を他の学習や生活で活用する場面の設定
- (2) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化



R5 2年次 ～学習の基盤となる資質・能力を育てる～

- (1) 教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成する授業づくりの充実
 - 育成したい学習の基盤となる資質・能力について具体化し、関連する授業での実践
 - 資質・能力を活用・発揮させ、確かなものに育成されているか評価方法の検討 など
- (2) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化
- (3) 自立活動の指導と教科指導との関連にかかわる実践



R6 3年次 ～大笹生支援学校で育てたい子ども像を目指して～

- (1) 1・2年次の成果を生かし、「大笹生支援学校で育てたい資質・能力」について教科等横断的な視点に立った授業づくりの充実
 - 児童生徒の資質・能力育成を目指し、各学部の重点目標を具現化する授業実践
 - 学習の基盤となる資質・能力や教科等の学習を通じて身に付けた力を活用していく授業実践
- (2) 年間指導計画一覧表の活用 教科等横断的な視点での授業づくりの可視化
- (3) 自立活動の指導と教科指導との関連にかかわる実践